

酒・藤倉の一族・中島新左衛門、先として所々の軍兵雲霞のごとく馳せ集まり、中にも浦の城代兵庫守盛長は、すぐれて華やかに出で立ち、その日の装束には、上には萌黄の腹巻、白龍の甲を着け、本重等の弓の真中取り、鷲の羽の鏑、矢籠胡篋を背負い、さも尋常に鎧、御前に伺候あり。誠に太刀ともに二人に勝りて見えにける。

さてまた九郎殿、その日の御装束、肌しろ肌に白練の絹を着け、上には紅葉に笠子の御小袖、唐綾の御直垂、紅の御袴を召し、立ち烏帽子にて広間へ出させ給いける。

さて、人々も装束なされ、先、八柳長門守の装束には、白練の小袖、上には黒皮おどしの鎧取つて、さつくと着、おんとり上り高紐にかけゆつて上帯ちやくとしめ同色の甲を着け、太刀横たえ広間にこそは畏る。石見守も肌には何となく上には小桜おどしの腹巻に同色の甲を着け、重藤の弓の真中握り、重代の太刀をはき、同じく広間に伺候する。馬場目玄蕃亮も肌には紅の小袖、上には卯の花おどしの腹巻に、龍頭打ちたる甲の緒をしめ、太刀に取つては、いかもの作の三尺八寸はくまに、弓は重藤の二人張、鷹羽の鋒矢を負い、同じく広間に畏る。そのほか、後藤兵部・大井将監・大久保蔵人之助・後藤采女正を始めとして思い思いに装束し、何れも甲のきら天に輝き、あるいは広間あるいは庭上に並び居たるは、誠に目を驚かすばかりなり。

九郎殿、人々に対面し仰せけるは、先ずもつて遠路と申し、古のよしみを捨て給わず早速参入候段、ひとえに九郎本懐に相叶う所なり、喜悅斜ならず存するなり、偏に頼み入る、と仰せらる。さて、片時も早く取りかけて亡すはかり事專一なり、承る所、愛季檜山の城を後詰めとし要害結構と聞いてあり、彼を檜山に移しては由々しき大事に及ぶべし、先ず軍神の血祭りに檜山の城大高相模守を責め落とし、火の手を合図とし帰軍に男鹿の城を責め落とさんと思ふはいかに、と仰せける。一座の人々この儀しかるべしと畏る。

その時、後藤兵部罷り出、仰せ御尤に候、城之助殿男鹿の城に立て籠り、もし難儀に及び候わば切山は名城なれば切山の城へ移るべしと、内々その用意と承り候と申し上げる。盛長すすみ出、男鹿の城切山の城なればとて何程の事かあるべし、即時に踏み落とさんこと何の子細か候べし、御心安く思し召せ我君様、と手に取るように申し上げる。一座の面々尤と同じつつ陣屋陣屋になりにける。彼の人々のありさま天晴功なる者どもなり。

愛吉公、軍法、方々手分けの事

かくて九郎殿仰せけるは、それ軍は勢の多少に寄るべからず、昔、平家の大将宗盛公、四国阿波の大裏に数万の勢にて立て籠り給う、源九郎義経、八十三騎にて鳴戸の大裏を責め落とし給うぞかし。我小勢なりとも運に任せ檜山切山の城代大高相模守を責め落とし申すべし、この切山と申すは